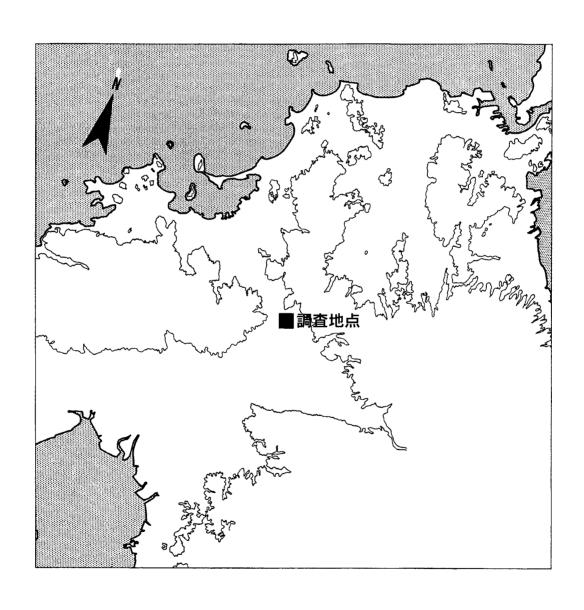
## 下見橋橋台確認調査

筑紫野市文化財調查報告書 第81集

2005

筑紫野市教育委員会

# 下見橋橋台確認調査



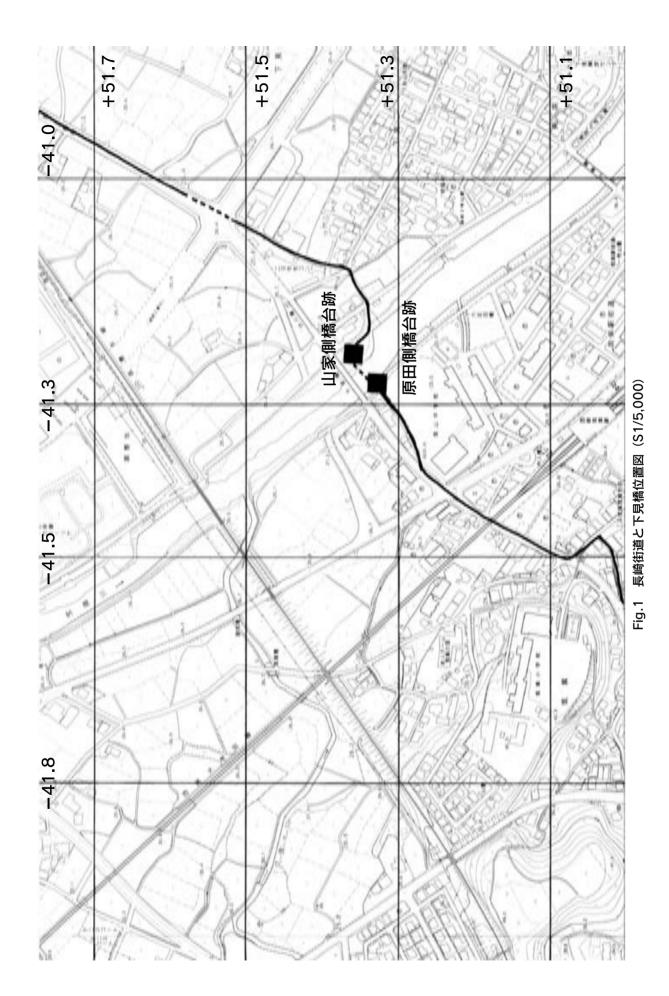
#### 例 言

- 1. 本書は、筑紫野市教育委員会が、福岡県那珂土木事務所河川課より委託を受けて調査した筑紫野市大字下見に所在する下見橋橋台の調査報告書である。
- 2. 調査は、平成12年度と平成13年度に行い、平成12年度事業については奥村俊久(当時文化財 担当技師)が、平成13年度事業は渡邊和子(当時文化財担当技師)が行った。
- 3. 平成12年度の調査を第1次調査とし、平成13年度の調査を第2次調査とした。
- 4. 調査に係る実側図作成及び写真撮影は、池松幸路・奥村・渡邊が行った。
- 5. 本文中の用語については、石材用語辞典を元に使用した。
- 6. 報告書掲載の挿図の製図は、(有)文化財テクノアシストに委託した。
- 7. 挿図中に使用した方位は、日本測地系の座標北を指し、磁北を示す場合は挿図中にG.Nを記している。
- 8. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

## 目 次

## 本文

						頁
1.	調査に至る経過					5
2.	位置と環境					·····5~6
3.	調査の内容					6
	①平成12年度の調査					6
	②平成13年度の経過		•••••			11
	③調査の内容					11
4.	小結					16
挿図	(Fig.)		頁	図片	反(PL.)	頁
Fig.1	長崎街道と下見橋位置図(	(\$1/5,000)	1	PL.	•	2
Fig.2	きょうだい	S1/2,500)	4	1 12.	山家宿方面をのぞむ	
Fig.3	原田側橋台石垣実測図	(S1/80)	7		原田宿方面をのぞむ	
Fig.4	山家宿側トレンチ	(S1/40)	7	PL.:		3
_				ГL.,		J
Fig.5	山家宿側石積み実測図	(S1/80) <del>1</del>			原田宿側・山家宿側	
Fig.6	原田宿側橋台石垣実測図	(S1/40)	13	PL.	3 山家宿側トレンチ	8
Fig.7	トレンチ土層	(S1/40)	14	PL.	4 山家宿側トレンチ	9
Fig.8	南側石垣側面図	(S1/40)	14	PL.	5 山家宿側石組み	10
				PL.	6 原田宿側橋台石垣	12
				PL.	7 石垣近景及びトレンチ	15



-1-



山家宿方面をのぞむ



原田宿方面をのぞむ

PL.1 下見橋からの全景



原田宿側



山家宿側

PL.2 調査前の全景

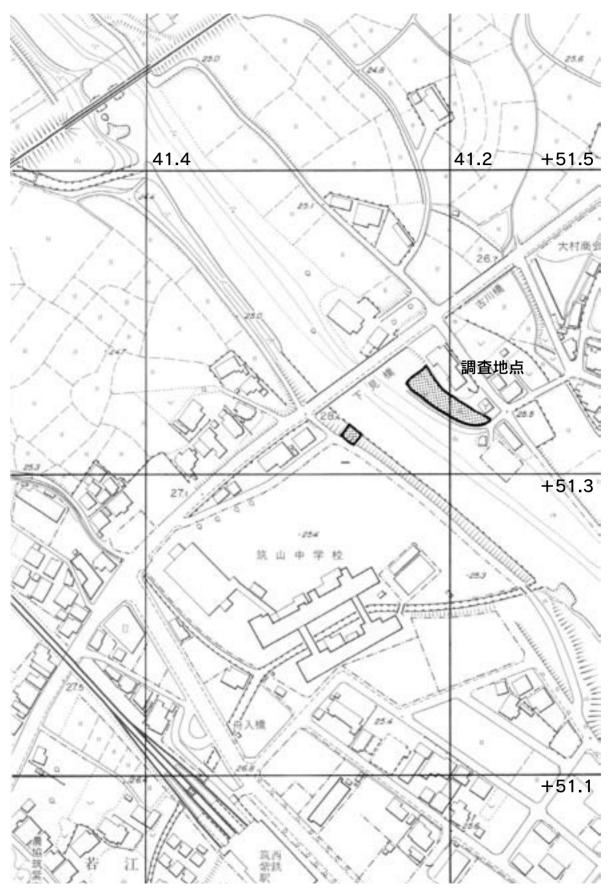


Fig.2 下見橋橋台周辺地形図(S1/2,500)

#### 1. 調査に至る経過

福岡県那珂土木事務所所長から宝満川河川改修の工事箇所について、平成9年5月22日付で筑紫 野市教育委員会教育長に対し「文化財の有無について(照会)」の提出がなされた。

当該地は、長崎街道ネットワークの調査により長崎街道の路線上に位置している事や松尾昌英氏著による「筑前の長崎街道」における長崎街道の路線上に所在すると予想されたため、筑紫野市教育委員会では現地確認踏査を行った。現地確認の結果、川の両岸には、橋の橋台と推定される石垣が遺存する事を確認した。

この確認踏査を踏まえ、筑紫野市教育委員会では同年5月30日付で那珂土木事務所所長に対し「文化財の有無について(回答)」を行った。その折に現存している両岸の石垣について保存を要望した。

平成11年8月24日に土木事務所より両岸の橋台の保存についての協議を行いたい旨の連絡があった。これを受けて市教育委員会では、再度現地の確認踏査を行ったところ山家側の橋台が削平されている事に気づき、直ちに那珂土木事務所河川課に連絡をとった。同年9月6日に福岡県教育庁福岡教育事務所・県那珂土木事務所河川課・施工業者を含め事実確認を行い、対応を協議した。協議の結果、那珂土木事務所から経過説明を文書で提出する事と併せて山家側については、文化財保護上の措置をとるように指導した。その後那珂土木事務所より「文化財保護法第57条の3第1項」に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出され、市教育委員会は直ちに県教育委員会に進達した。同年9月末に県教育委員会より那珂土木事務所に対し記録保存のための発掘調査を実施する旨の通知が市教育委員会に到達し、直ちに那珂土木事務所に通知した。

この後、那珂土木事務所河川課と発掘調査に係る対応を協議し、その折りに原田側の橋台石垣については、当初のとおり保存の要望をした。10月初旬に河川課より発掘調査の依頼の申し入れがある。また発掘調査の申し入れとともに保存の要望をしていた原田側の橋台については、要望どおり保存が可能であり、橋台の周囲の整備については、河川工事の際に市と詰めたい。との回答があり、発掘調査の着手とおよび保存について合意に達した。平成11年11月20日付けで「埋蔵文化財調査委託契約書」を締結し、発掘調査を実施した。現地における調査は、12月中旬より写真測量による橋台石垣と山家側の石積みの図面作成を先行して実施し、明けて平成12年3月に山家側の橋台のあったと推定される位置の発掘調査を行った。

#### 2. 位置と環境

江戸時代、江戸幕府と諸国を結ぶ交通網には、五街道と脇街道があった。その中の脇街道であった長崎街道は、九州一の大街道として賑わいをみせていた。

長崎街道の江戸幕府における正式呼称は長崎路、別名、肥前街道・豊前街道と云われ、ここは主要な幹線道であり、比較的早い時期から長崎海道と呼ばれ、近世前期の「筑前国続風土記」や同後期の伊能忠敬の「測量日記」では長崎街道と記されている。この街道は、鎖国体制の日本において外国からの文化や技術などを伝える唯一の「文明の道」として重要な役割を果たしていた。

この長崎街道が整備されたのは、「島原の乱」を契機として行われたと一般に云われ、特に幕府の 意を汲んだ佐賀、福岡両藩などにより推進されたものと思われる。

この事は、山家宿茶屋跡脇にのこる「恵比寿像」の背面の銘文からも窺える。

銘文には、「当町初建之」として「去慶長拾六年辛亥十月上旬、播州之住人桐山丹波守創造之、□□□刻一基之石像、為国家安泰斯地長久□□、時寛永拾年□□□志方彦太夫」と刻銘されていて、山家宿が、慶長16年(1611)10月上旬、知行主桐山丹波守のもと志方彦太夫の努力で創設されたことは裏付けされている。

長崎から小倉(大里)までの五十七里(約240km)の長崎街道には25箇所の宿駅があり、このうちの福岡藩部分の黒崎―木屋瀬―飯塚―内野―山家―原田の各宿は、小倉道・筑前六宿街道・冷水道とも呼ばれ大変な賑わいをみせていた。

今回の調査対象地は、筑前六宿の山家宿から原田宿を結ぶ推定街道沿いに位置する。

この山家宿と原田宿を結ぶ道に関しての記録は、那珂土木事務所所蔵の「土木取調帳」下見村の項(明治22年以前)に「東京ヨリ長崎開港場へ達スル道路岡田村界ヨリ筑紫村界迄 一国道第四号長六百四拾八間 幅平均弐間 内長三拾八間 堤防上道敷ニ付敷乃別除ル 内長六拾八間 道央岡田村界 此敷地乃別四乃弐畝弐拾八歩 板橋 壱ヶ所 但拾間以上」とまた「東京ヨリ長崎へ達スル道路甲岡田村界ヨリ筑紫村界迄 国道一等 一邸内延長六百四拾八間 幅平均弐間 内長三拾八間 堤防上道敷ニ付敷乃別除ル 内長六拾八間 道央岡田村界 此敷地乃別四乃弐畝弐拾八歩 宝満川通村内字外古川 四番 板橋梁 壱ヶ所 長弐拾四間 巾壱間三尺 橋杭三本建五組」と二ヶ所の記載があり、明治22年以前は、ここが長崎へ向かう道筋であった事と板橋があった事を示している。

また享和二年に尾張の商人菱屋平七(吉田重房)が、書いた「筑紫紀行」によれば長崎からの帰りに原田宿に泊まり、次の日には太宰府を経由し唐津街道を帰路として、冷水越えはしなかったものの山家宿についてと山家宿に至る道程を記述している。これには「宝満川には板橋あり、橋銭一文づつ出さしむ」とあって、享和二年の原田宿から山家宿までを知る事ができ、川には板橋が架かり、橋銭を払っていた事も確認できる。

#### 3. 調査の内容

#### ①平成12年度の調査

調査は、原田側の橋台石垣・山家側の石積みの現況測量図の作成を行った。

平成9年度に確認した橋台の痕跡が、工事により埋没しているのか、削平されたのかを確認する ために推定位置にトレンチを設定した。断面観察では、工事に伴う攪乱土が堆積するだけで、遺構 らしきものも確認できず、やはり山家側の石垣は削平をうけたものと考えられた。

また現地には、東側にある邸宅の石垣と併行する石積みが遺存している。この付近の推定街道筋は、橋を渡ると直角に曲がる道を表記している事もあり、この邸宅と石積みの間が橋につながる道路跡とも考えられたため石垣から石積みを縦断するトレンチを設定した。断面観察では、現地表面より50~60㎝の厚みで砂礫面があり、この砂礫層を幅80㎝・深さ20㎝程度掘下げて、そこから石を野面積みしていた。しかしこのトレンチの断面では、明確な地業の痕跡は確認できず、基礎地業は地山を掘りくぼめただけである。また石積みの背面側には、小礫を用いて裏込めとするが、粘土等の使用もなく単なる高低差の調整を図るもので、厚みもない。また石積みと石垣の間の堆積土は、にぶい褐色土が一層だけであった。その層には、水田やその他の土地利用の痕跡は確認されなかった。このにぶい褐色土は、状態から比較的近年の埋没と推定される。

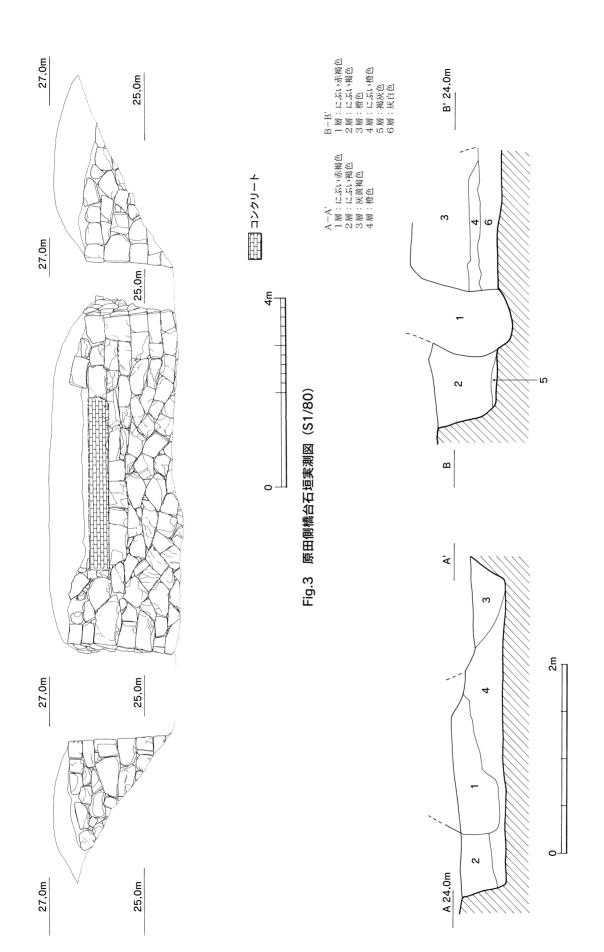
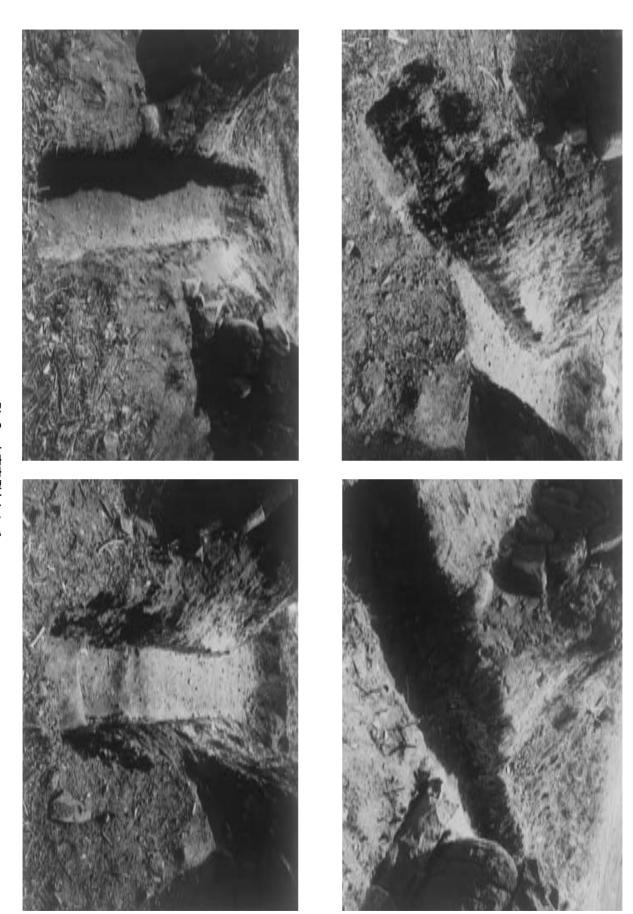
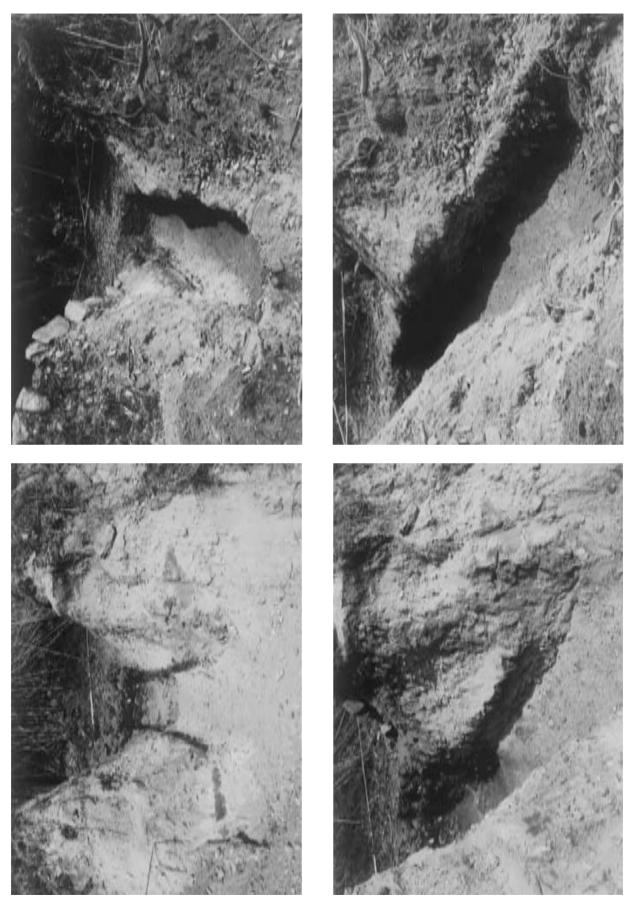
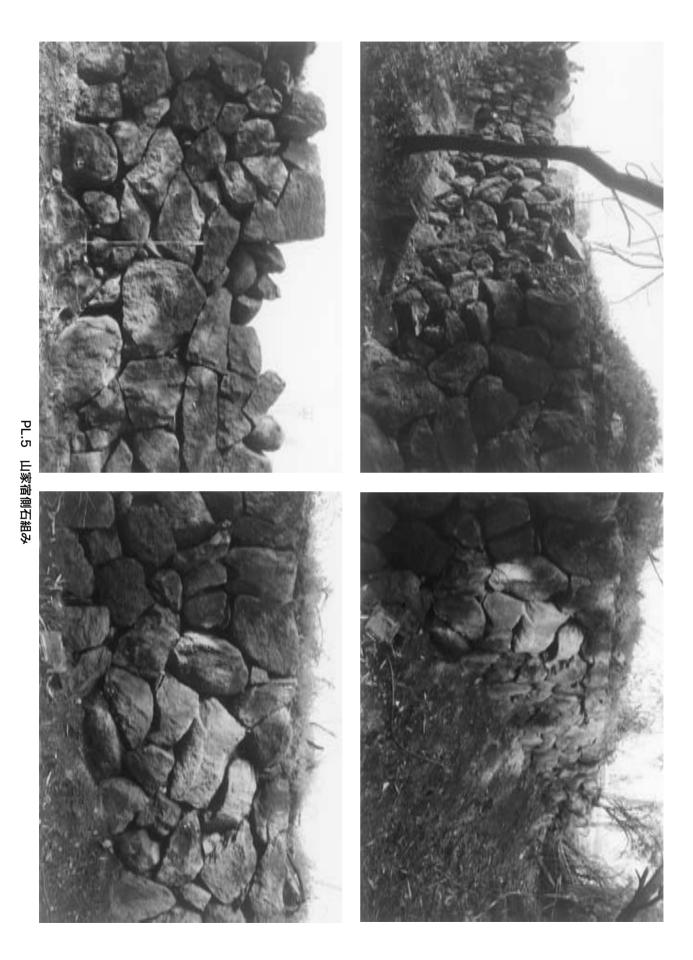
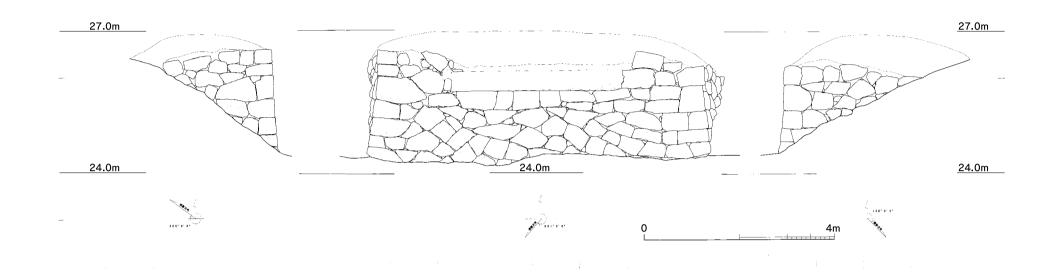


Fig.4 山家宿側トレンチ (S1/40)









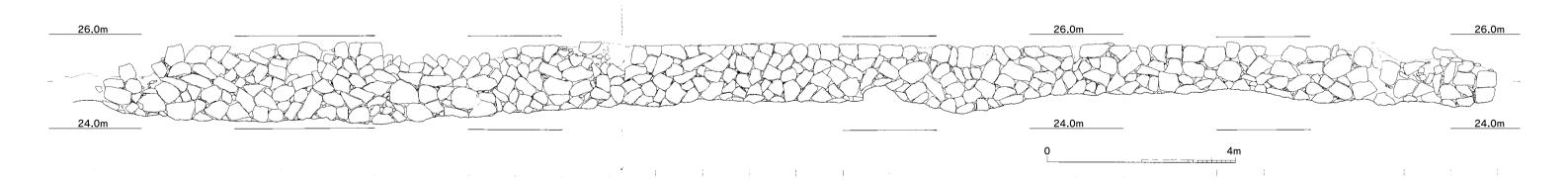


Fig.5 山家宿側石積み実測図(S1/80)

#### ②平成13年度の経過

平成12年度に「原田側にある橋台石垣については、設計上現地での保存が可能である。」と那珂土 木事務所と協議が完了していたが、平成13年8月に那珂土木事務所から橋台石垣について再協議し たい旨の連絡があった。これは護岸工事の設計にあたり防災上の理由で橋台の基礎部分を埋め込む ため、当初計画していた現状の保存措置が取れないとの内容であった。

これをふまえ現地において福岡教育事務所および市教育委員会立ち会いのもとで、那珂土木事務 所河川課と設計業者を含め協議を行った。その結果、橋台石垣の基礎部分が埋め込まれる事につい ての了承と基礎部分については、トレンチを設定し確認調査を実施することで協議を終えた。

その後、土木事務所と調査委託についての協議を行い、平成13年9月14日付で覚書をかわし、同年9月17・18日に第2次調査を実施した。

#### ③調査の内容

調査は、まず現状の橋台石垣の清掃と写真撮影を行い、石材の加工や石の積み方などの記録作成を行った。全体の石材を観察すると正面側と南側面の石材には矢割りの跡を残すものも含まれるが、北側面の石材には含まれていない事が確認できた。但し、正面石組みの中央部に長さ20cm、幅5cmの筒状の痕跡のある石材が一石確認された。この筒状痕跡は、近代の石割りの際に火薬を詰める穴の痕跡と思われる。また石材表面の仕上げ加工は、すべての石材が自然石のままである。

橋台正面側の上部規模は、天端石の幅7.1m、床版の幅3.6m、床版の高さ0.45mで、床版から天端石までの高さは、0.9mを測る。しかし床版部分は、コンクリートで埋められているため詳細は分からない。

石垣正面中心部に水際に向かって長さ2mのトレンチ-1を設定した。

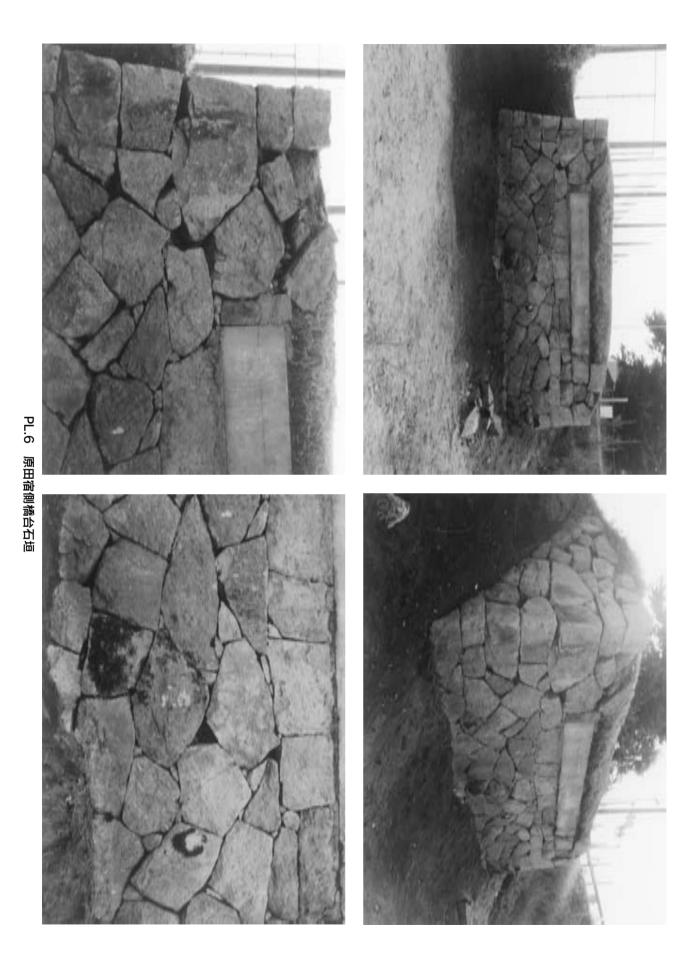
トレンチの観察では、現在露出している石積みの下にさらに三石の石が確認された。最下段の土台石には、やや大きめな安定した石材が据えられて根石になっている。根石は比較的浅い位置に埋置される。根石から二番石までの石材は、根石とほぼ同じ大きさの石材が据えられていて、この二番石までは目地の揃う布積みとなっている。確認された根石から床版をのせる部分までの高さは、2.4mを測り、根石から天端石までの法高は、3.3mとなる。また根石から二番石の石材表面にも「のみ切り」などの仕上げ加工は施されてない。

根石部の下は、粗い砂の地山となる。この地山は水分を含み上部の荷重を支えられる特殊な地盤とは到底考えがたいものであった。また水際側には工事に伴う攪乱土が堆積していて地山はなく、すでに旧地形を残していないことが確認された。このため石垣から水際に向かう基礎地業の痕跡は、確認できなかった。地盤が軟弱にも関わらず根石の遺存状況は良好で「ズレ」や「飛び浮き上がり」などは見られなかった。ここでは、軟弱地盤を補うために根石の下の地山を掘り込んで、その地山上に20~30cmの厚みで竹を敷きつめ基礎地業としていた。この手法は、地盤の安定しない軟弱土で用いられ敷粗菜工法とよばれている。事例として「国指定史跡水城」の発掘調査があげられる。現在の土木建設では、胴木工法と呼ばれるものと同様の工法であろう。

次に南側面部の石垣に沿ってトレンチー2を設定し、断面観察を行った。

側面部の地山は、土手の傾斜に沿って、浅く掘削され、石はやはり浅い位置に据えられていた。

地山には拳大の大きさの礫が混じり、正面側の軟弱地盤とは違いをみせて安定している。石垣勾配は、二番石までが、緩い勾配をもち、三番石から天端石までは御寺勾配となる。



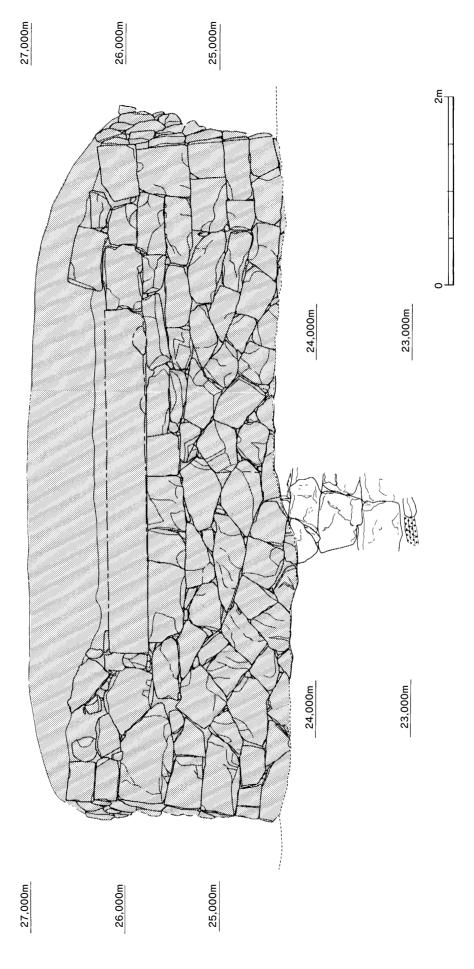
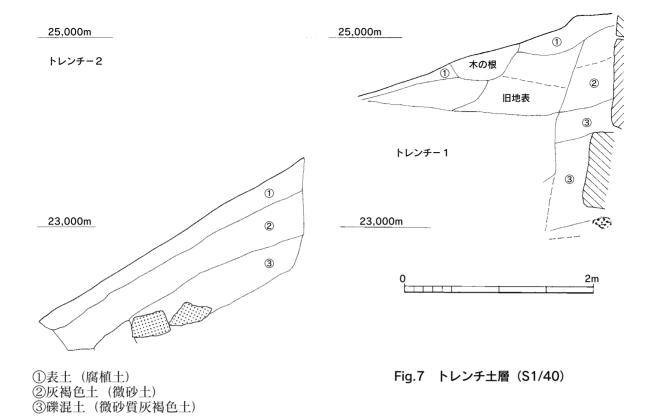


Fig.6 原田宿側橋台石垣実測図 (S1/40)



27,000m
26,000m
25,000m
25,000m
24,000m
24,000m

Fig.8 南側石垣側面図(S1/40)



矢割り跡







PL.7 石垣近景及びトレンチ

次に石組みを観察すると北側の角部の天端石と南側の角尻石付近に石材の消失やズレがある。また北側面石垣と南側面石垣を比較すると北側面部が、ややはらんだ状況が確認できる。

北側隅部の3・4番角石は、長辺が短辺の2倍以上ある石を交互に組んで、石の間には隙間がない所謂「算木積み」で石組みされている。しかし5・6番角石の石材は立方体である。ここの石組みにも隙間はない。これも広義の「算木積み」と考えてよいかも知れない。また5・6番平石からは、谷積みで石材は、やや丸みを持つ。石の間には隙間が目立つが間詰石は組まれていない。

南側隅部も「算木積み」で石組みされるが、石の隙間は間詰石で化粧されたものもある。全ての 平石は、石材に丸みがあって石の間の隙間も目立ち、石組みも乱れた積み方になっている。

正面石垣は、全て谷積みで石組みされている。北・南側隅部に近い石組みには石の間の隙間がなく、石材も同じ形状のもので揃っている。しかし石垣中心付近(床版下の中心部)の谷積みは、石の大きさや形状が揃わず、石の間の隙間が目立ち、間詰石で化粧し石組みされる。先に記述したように石組みのなかには火薬を用いて割られた石材が一石使用されている。

このように北・南・正面側石垣には石材や石組みの違いがあり、明らかに石積みの仕様が2回以上数回替えられた事は窺える。本来の谷積みは江戸後期に始まった手法であるが、明治以降の石垣の積み直しにも採用されていたと云われる事や火薬を使用して割られた石材が含まれる事を考えると明治以降の積み直しである可能性も考えられる。このため現段階では、橋台の明確な建設時期の確定はできない。

#### 4. 小結

橋台の概要は今まで述べてきたが、平成2年当時の地図(Fig.2)で確認すると山家側にも橋台らしい高まりが確認できる。原田側とこの高まり間の長さを測ると約40mとなり、この長さが、推定橋長と考えられる。今回報告した橋台が「土木取調帳」に記述されている板橋のものである確証は、現段階ではない。しかし推定長崎街道は、この高まりと原田側の橋台を通ると考えられている事から明治22年以前に架かっていた橋の位置もほぼ同じ所で、橋長も40m前後あったものと推測できる。また下見橋の構造を想定するには、やはり「土木取調帳」に記述された古川橋が参考になりうる。この古川橋は下見橋の北側にあって、橋の長さもほぼ同じで以下のように記述される。「・・・・宝満川通村内字外古川 四番 板橋梁 壱ヶ所 長弐拾四間 巾壱間三尺 橋杭三本建五組」この記述を参考にすると下見橋も同様な橋建構造であったと思われる。

次に「筑紫紀行」に記載された頃の橋構造について考えるには「土木工要録(付録)」(江戸科学古典叢書8)の板橋・土橋の項が参考になる。これには両岸壁には「鶴丸太」を打ち「鶴丸太抱杭」で固定した橋台を設置し、河川中には数本の杭を打ち一組の「梁」とし、「桁」を架けていた。との記述がある。これらは多くの土橋・板橋の橋建に用いられた近世の橋建の普遍的なものであったようである。今のところ「筑紫紀行」の書かれた享和二年頃の下見橋も普遍的な橋建の構造であった可能性があったと考えておきたい。

さらに「廃藩置県頃の下見橋は土橋であった。」との伝承もある事から、再度「土木取調帳」の下 見橋周辺の項を精査した。下見橋の周辺には土橋や石橋の記載も多くあったが、いずれも橋長が5 ~18m規模の橋で、それ以上の橋長には見受けられなかった。現在「土橋」であった事の資料も確 認できないため、この報告では、明治22年以前の橋は、土橋ではなく板橋と考えておきたい。

### 報告書抄録

ふり	がな	したみばしきょうだいかくにんちょうさ								
書	名	下見橋橋台確認調査								
副書										
巻										
シリー	筑紫野市文化財調査報告書									
シリー	第81集									
編集	渡邊和子									
編集	筑紫野市教育委員会(教育部文化財課文化財担当)									
所 在	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1									
発行年	西暦2005年 3月 28日									
		コード 北 東								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村	遺跡番号	緯	経	調翟	調査期間 調査面積		調査原因	
	ない 大 しの し	176								河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		朱	持記事項	
		近世以降		橋台						

### 下見橋橋台確認調査

筑紫野市文化財調査報告書 第 81 集

平成17年3月28日

発 行 筑紫野市教育委員会 〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1 TEL092-923-1111(代) FAX092-923-9644

印刷 (資) 四ヶ所印刷福岡県甘木市大字馬田336